遊嵐山序　　月居士草

聖の御代に腹ふくれたるもち東山
西野の月に吟行ままにまかせ各
とにて吾妻を故人といふあり
浪花を旧里とさしたる或ハ他の有国
をかなしみ名所を立て八舉頭望山月
低頭思故郷の趣に吟ずかりて之を

二八と明るし三秋の新も限あれども十七
日八嵯峨の秋てさとる木のもとの八
面影はさらぬ月のくもりなき秋空
色あらぬ乃のくれつ程苔の衣を浸し
廣沢大沢の池こゆるん堂宮八
神さび妓王寺無常堂てうり小倉山
ふれもさむる池八はたまる時雨をあ
惜くの初あみちる冬乃ゆくをを新へ八

下系の萩を今をちりて日くらし
面影の原おとゝ藤袴答をちるめて
秋を雄清滝をとゝ所の風を思
発ゝ月八ほのゝ一声を待ひと
群の志ゝをなるあ恨ゝ多き大井川
乃夜抱日興ゝくいひをはくさあ
時ゝ原重ゝ宮ゝ立待月ゝ
中秋生ゝ八渡月橋ゝ為て魂の

法輪てかよぬも一虎渓のこ光世て
生て天龍の古陰にあらハ雪霜乃
門也敲ら茅山村燈出水郷人稀て
姉けて山谷て水ものいとあと暗て
明日を契て帰る十八日はとめて又
嵐山紅葉むすまを動きてうに
てらて山色更て紅ハ初て鮎
を釣ぶる紅きらをて三盃の鈴をきハ

色葉を抹て多有心の座てはらあり
灰吹を鳴して八無の乃席に入両船
三舟の風流まつ胸裏てうう帰
秋空乃うはりかり社多和晴光を
そそりんとす社ハ雪霧峯をうつそ
烟雨てうはつけも嶺上すと朗て
そを六時の秋色一るさ数り風
狩の神紅くはーめて終日雪月花の

三軒家々後ふるさとを聖の世代
を楽むものかな

面晴れさうな月の拾ひもの　立雲

新たうすむほど月乃嵐山　菅鳥

秋風も楊木すりてあり山　月居

柿踏てうつ松虫の小舎乃舞閣

唐尻乃岩屋ふる稲乃ふる不木

十四夜下河原にて
面白さうなり　立雲

稲妻の月の光乃宿かれ

ます生虫すむ虫ときかれ松月居

菴の秋興あるまへ眠るて菅鳥

性なうも酒を一利　雲

新川乃はて船をあらん　居

小松ばらのうしろの陽炎　多

万歳の国へうるもあらうれの雲
土乃つれさく古京乃春居
思すてゝ紅葉の花にあれて多
はるしの梦乃ちめて寒き重
え改てうう刹らるあうるさも居
ちうき敲てまと山の鐘多
煙ゝ温泉のふるに形をしる重
さい秋しとうゝ子ゝとうの月居

牛うゝ金ゝとうゝ肌さうゝ多
大多あとれはさいが秋重
うの秋乃紅葉も春ハ花咲ゝ居
まうふきあうゝ三ッのてふゝ多

昂事

いなの妻乃月もたゝ托るの雲笈鳥
稲妻ときゝなくうう雨乃月月居

おとろくを時雨の音や　嘯月　月居

みくまの寺にもきて
宿る有り日ふる雨
ふりたる雨の
あるけしき中も
東山の秋はをもはぬ

[illegible]の山の霜　義容

仲秋

名月や虫なき草に雨もあり　不木

秋の月ふうり掌の中の秋　五雲

酒五升うるさに売る別して　月居

庭名おもあるる住居之乃秋　義容

水風吹く雪打行をけくの居　義鳥

西玉の音ちうさをけそう　春卿

子ゝせらぎ白く〳〵長き雪
母ぼん菊原にてうゑ〳〵新木
黒髪をしぼりまるはうとき流し客
面ろいのうれ神樂始る居
姉嘆の松をたゞゆる新おもる
姉わさに掉をうちかゝけり雪
香わうう帝ふきり安立湖の秋木
ひるのうち出家七夕の月客

撫でろ家の母中井ろき居
あてもちめてもゝ惟然坊る
咲花のた和谷水ちる八〳〵雪
うるひすを〳〵待う浮彩木
車押寺院春町のうに客
捨丸ふ捨子ゝと寺居
丸金〳〵虫ゝる小豆撰ゝ〳〵る
ふらてとく〳〵ゝ陸八専雪

炭火のもゝ後の夜を雪ゝ出木
厂鴨 奢る星のゑひも涛冬
古琴をゝ奥浄るり合すも居
わすれんとせるゑのなさる
袖当しきのふの昔りて雪
ゝゐゝゝゝゝ氏屋上乃月木
雪ゝ孤てをゝあれ自砂冬
梨子ゝ棚ゝ寺ゝりこのゝ居

應仁の乱ものゝかゝれ住る
牛ゝ京る身はこゝ海安さよ雪
蝋しゝ星馬乃ふむ浦乃釈風り木
枝木あゝたゝ熊野の春冬
裂織毛氏笠の実乃花ゝも居
小あゆ鱠ゝいさ学ちゝを雪執華

各詠

名月は雲の上にまつ毛より　立雲

白かゆをと二度さく月の菴　月居

宗鑑を見て池を持ち久乃月　舞路

もゝ爲のあるひは生るゝきものゝ　春卿

教しなをらひを寄て
ゆるゝさの落て落く

名月は明るまゝに秋の山　管鳥

東寺の茶店にて人〻を
倡ひ〻るゝ面文を限て
門内乃あるゝ山伏許さず

いさよひの雲かゝ拾ふいとはゝ　暮雨

面屋せ乃影ハ二八のかゝ姫ふ木

ゆゝ敷て〻ゝ〻ているゝ月ゝ　春々

いさよひの影ハのゝまハくゝ月　爰る

いちよ乃ハ乃商ハ林麻に成〻ゝ月　月居

いさよハ花伊ゝを見てゝみ山　又雲

書露古道後

嵯峨者天下之勝地也而遊嵯
峨者天下之勝遊也遊勝地而
為勝遊者天下之樂事也而其樂
者誰必化坊月居士管鳥蕉
翁及家也此三世者何人哉淑蕉
翁之風雅變者也戊申
之仲秋二昏一雷上倉山下渥

水一吟一咏顧影自雄案謂居士
曰古之人必遊必遊則有池
居士甚人也何不池曰吏嵯峨若
天下之勝地也遊勝地而池勝遊
非大手筆乎而可遂讓必化
坊曰吾老矣豈當王命之任哉
於是乎居士目引筆而序附
之以諸子所詠數事及六五之

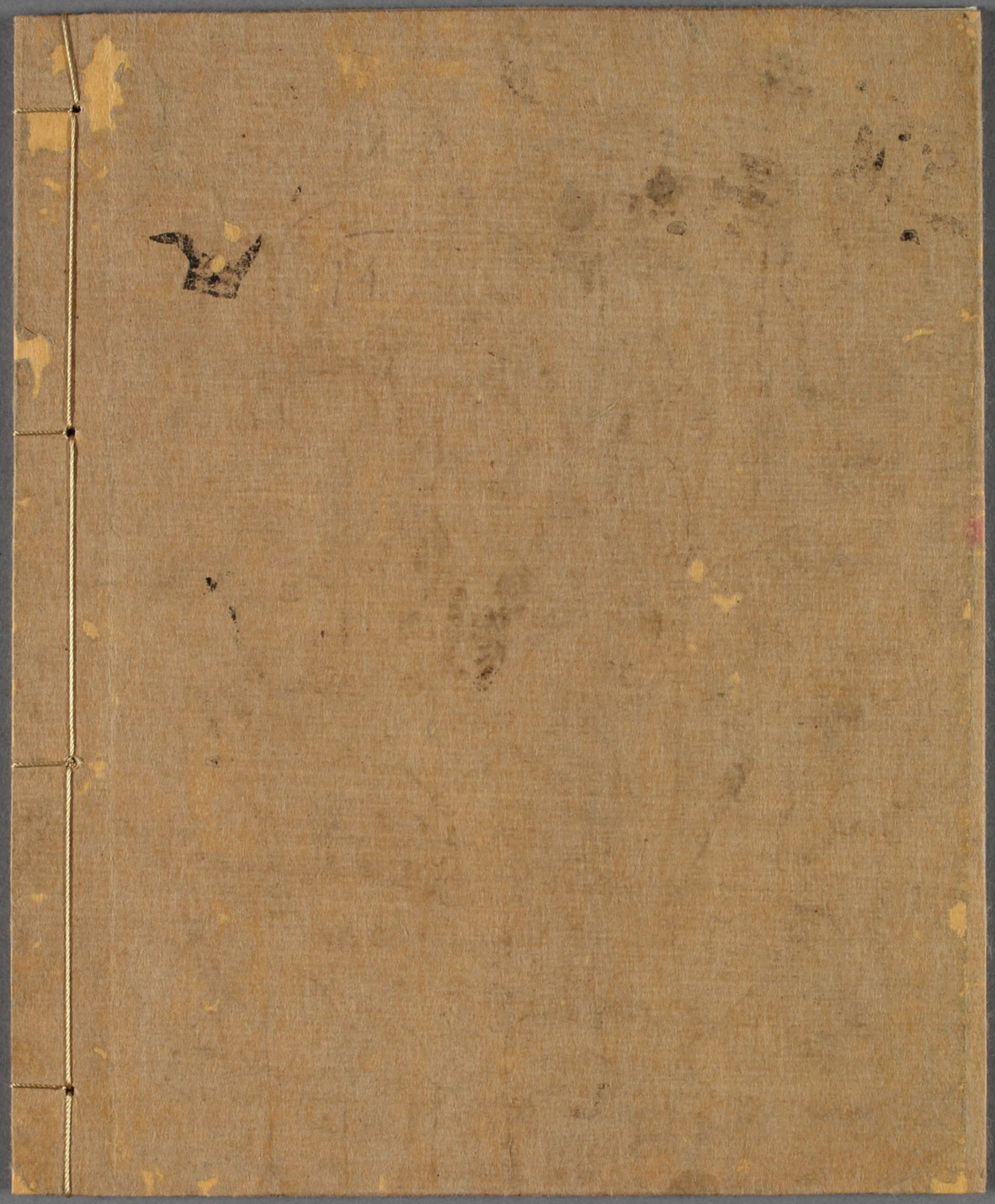
連句ニヲ小冊子成名テ曰露古道

余曰嵯峨者天下ノ勝地也遊ニ勝地ニヲ為ス勝遊者天下ノ樂事盡セリ

矣詩曰樂土ノ〻〻爰得ニ我所ヲ蓋

三曲者ノ〻謂ヒ也乎

天明八年八月

山城居　不木書

東京都立中央図書館